

○海外での研究活動や国際共同研究の進め方

- ・ 国際共同研究においては、問題意識や目指す方向性を共有するとともに双方の強みを明確化した上で、扱うテーマを確定させることに重きを置いている。
- ・ 国際会議の場でのディスカッションを通じて知り合った研究者とその後メールのやり取りを行う間に科研費に採択されたことで、国際共同研究が実現した。自らのアイデアを、相手方は応用という観点で使うという棲み分けがはっきりしており、研究をスムーズに進めることができた。
- ・ 日本の研究費を海外に持っていくことは難しいため、海外で研究を行う際は発注や支払い行為をしてもらえるよう相手方の仕事を手伝う、あるいは逆に彼らが日本で研究する際には関係する手続きを請け負うといった関係性の構築が重要ではないか。
- ・ 海外で科研費を執行する際は、相手方機関と覚書を締結することで日本の公金に対する責任やコミットメントを明確化させることが重要と聞いたことがある。
- ・ NIHのような海外の政府機関によるグラントは、同じ研究を長きに渡って続けている研究者が受給しているなど、全く業績のない新たなテーマではなく、所属している研究室のPIの研究テーマから外れない範囲で、独自のアイデアに基づいた内容でなければ助成を受けるのは難しいという印象がある。また、渡航先機関から給与を受ける立場でないと応募ができない場合もある。
- ・ 日本と渡航先それぞれの仕事のバランスを取るのは難しいため、時間を区切って取り組むことが重要ではないか。

○現地の研究環境、日本の研究文化との違い

- ・ 海外においては、相手方研究者に迷惑をかけてはいけないとか、手を煩わせたら悪いのではないかといった遠慮のスタンスは避けるべき。不安があるとしても、敢えて積極的にコミュニケーションをとった方が良い。
- ・ 海外においても研究環境の厳しさは日本と同様であり、成果が求められる場面も多くあるが、そうした中でも楽しさや自分を見失わないよう、しっかりとコミュニケーションを取りつつも、周りに流されないように研究を行っているほか、これまで日本で学んできたことを海外において伝えるという姿勢を大事にしている。
- ・ 欧米では議論することやそのための能力が重視されており、多文化社会において当たり前のことでも言語化することが重要とされている。日本人は概して議論が苦手

とされる一方で論理的に考える力は優れており、高度なディスカッションが出来ると思うため、言語化する力と議論する力を磨きたいと考えている。

- ・日本の研究費管理や支出のシステムは海外とは異なり、事務的な手続きやスピード感も、PI として複数の研究機関を束ねて研究を回していくことを前提にはしていないように思う。また、研究の規模が大きくなるとハンドリングが困難になる。
- ・海外で研究費を執行する際は、事前に所属機関の事務担当者と必要事項を確認する機会を作った方が良い。担当者が異動する場合に備えて、後任者とのスムーズなやり取りのために、話し合った内容は記録しておくことを勧める。
- ・研究費を滞在先に送金し、相手方のシステムで決済したところ、執行方法が違いすぎて精算処理に苦労した経験があるため、こうした方法は勧めない。研究費専用の口座を用意し、それに紐づけたクレジットカードで決済する方法が最も手間を要さなかった。
- ・スペインに滞在していた際、家族との時間を第一に平日は仕事を早めに切り上げ、土日に働くという考えが全くないなど、働き方に対する意識が日本と大きく異なっており、驚いた。議論を重ねるとい文化がない中で、相手の良い所を肯定しながらさっと切り上げることが重要という印象をもった。

○海外とのネットワーク形成・維持

- ・JSPS から助成を受けた経験のある外国人研究者で構成する[同窓会](#)が世界各地に存在し、滞在する国あるいは近くに所在する[JSPS の海外研究連絡センター](#)による紹介で会員の研究者と知り合い、そこからネットワークを築いた。
- ・相手方を自宅に招くなどの研究以外の付き合いをすることで、時間が経っても思い出してもらえそうな関係性を築く努力も必要ではないか。
- ・時差の関係でオンラインでのやり取りでは業務時間が合わないことも多いため、定期的に出向いて直接会うということが重要ではないか。是非関係を築きたいという研究者のところには一度出向いて話をしておく、その後の信頼構築がスムーズに行く。
- ・様々な場面で自身の研究を売り込んでおくと、ふとした際に思い出して声を掛けてくれる場合もあるため、そういったネットワークを大切にすべき。

○共同研究者・渡航先機関や所属機関との調整

- ・共同研究者を探すにあたって、全く面識のない研究者にコンタクトを取っても相手にされないことが多いため、所属研究室のコネクションや共通の知り合いを介した

方が話は進みやすい。一方、以前一緒に研究をしていたことのある研究者の所属機関へ再度渡航するケースも多い。

- ・相手方研究者はこちらに戦力になってほしいという思いがあるため、研究テーマは自身の技術や強みを活かせるようなものにすることが妥当だが、違う側面からのアプローチや、自身のテーマとは異なる相手方の研究を試みるというのも、思わぬ所で幅が広がり、その後の研究に活かせることがある。
- ・滞在先で得たデータの取扱いについて互いに不利益にならないよう、論文化する際には全ての関係者を共著者とするという内容を盛り込んだ協定を大学の部局同士で締結し、細かい内容に至るまで文面に記載して取り決めている。
- ・海外滞在にあたっては、受入れ証明を得るための手続きにかなりの時間を要し、相手方機関の事務担当者が長期休暇に入ると 2 か月程度連絡が取れなくなることもあるため、査証の準備には少しでも早く取り掛かる必要がある。
- ・スイスでは、日本から支給される給与額が国内各州が定める最低賃金に満たない場合、相手方機関から不足分の額を支給することが法律で定められているため注意を要する。

○海外での長期生活全般、現地生活情報、家族の帯同など

- ・日本の常識が通用しないことも多く、申し訳なさそうな態度で臨むとまともに対応されないため、主張すべき場面では強気な態度を示した方が良い。
- ・保険を巡る事情は日本と大きく異なっており、例えば米国の健康保険には歯科治療は含まれないため、歯科保険に別途加入する必要があるほか、スウェーデンやドイツでは見える範囲の前歯には保険が適用される一方で、見えない奥歯については全て自己負担となる。日本に帰国して治療した方が安い場合も多い。
- ・米国やカナダの国民保険は日本のように予防に重きを置いていないため、体調が悪くなって初めて医者にかかるようなシステムになっている。健康診断を受ける習慣もなく、自分の健康は自分で管理することが大切である。
- ・会社のサポートが手厚く現地事情にも詳しい駐在の日本人で構成するコミュニティに知り合いを作り、生活や保険の面でノウハウを得ることができた。
- ・ヨーロッパで家を借りる際は現地の銀行に口座を開設することが必須とされているが、開設するには現地の住所が必要であるため、住所が不要なオンライン銀行やマネー・トランスファーなどのアカウントを作ると手続きがスムーズに行える。

- ・国によっては家族の人数に応じて必要な部屋数が決まっているため、大人数になればなるほど、住居探しに苦労することになる。

○帰国後のキャリア形成

- ・日本とのコネクションを持たない状態で海外に渡航すると、ネットワークが切れてしまう場合が多く、長く滞在するほど帰国しにくくなるため、日本の研究者とコンタクトを取り続けることで、空いたポジションの情報等を入手するようにしていた。
- ・最近では教員募集において海外経験を重視している大学もある。海外経験がない場合は早めに助教のポジションに就けるとしても、その後のキャリア形成が難しくなる印象がある。まず助教になるにはコネクションが重要であるため、海外で研究をしながらも日本とのコネクションを途絶えないようにすることが大切と言える。
- ・メーリングリストを介して渡航中に日本のポジション募集の情報を得て、興味のあるものに応募していた。
- ・教育にある程度リソースを割いている大学は、日本の大学のことがよく分かっている前任校において教育歴のある人を採用する傾向があるように思う。

※これらの意見は交流会出席者の個人の見解に基づくものであり、独立行政法人日本学術振興会を代表するものではありません。また、同趣旨と考えられる意見をまとめたり、分かりやすさの観点から言い換えや補足を行った箇所があります。